

令和 6 年 4 月 24 日現在

機関番号：14403

研究種目：若手研究

研究期間：2021～2023

課題番号：21K13638

研究課題名（和文）正課と正課外の学習活動の往還による越境学習の支援デザイン

研究課題名（英文）A design of learning support for cross-boundary learning between formal and informal activities

研究代表者

山本 良太（Yamamoto, Ryota）

大阪教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：00734873

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、正課と正課外の学習活動の往還による教育的意義を明らかにし、そのための教育支援を提示することである。調査の結果、両活動はその目的等の違いから基本的に断絶しており往還は容易に生じないものの、キャリア展望や正課外の活動における問題状況が正課で得た抽象的な学術的知識等の適応を促進し、知識や経験等の意味的拡張という正課と正課外の学習活動の統合を通じた学習へとつながる可能性が明らかになった。このような学習の支援として、（1）両活動への参加を通じた学習に対する正統性を保障すること、（2）問題状況の明確化と知識経験等の適応可能性を思考するためのリフレクションの機会を設けること、を提案した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、高等教育における越境的学習の具体的様相を示したことにある。これまで、看護教育や教員養成の文脈における越境的学習の調査は行われてきたが、それらに加え、特定の職業的専門性を軸としない学生の越境による学習の実態を示すことができた。

また、社会的意義は、高等教育課程に在籍する学生の主たる学習機会である正課と正課外の両学習活動の往還と統合を通じた学習およびそのための支援方法を示したことにある。容易に生じない両活動の往還と統合を支援する具体的方法が提案され、今後の実践と評価へと発展させるための基盤を構築することができた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research project is to clarify the educational meaning of cross-boundary learning between formal and informal activities and suggest its educational support. As a result, fundamentally, the students do not learn from cross-boundary situations between formal and informal learning activities because they do not find a linkage between both activities. However, their career perspective or problem situations of informal learning activity led to applications of academic knowledge or experience that they acquired in the formal learning activity, and they achieve expansion of the meaning of knowledge or experience through the integration of both activities. In order to support the students, the author suggests (1) authorizing the legitimacy of participation in both activities and (2) providing opportunities for reflection to define the problem situations and to find the adaptability of knowledge or experience.

研究分野：教育工学

キーワード：越境学習 正課教育 正課外学習 学習支援 大学教育 キャリア展望 問題解決

1. 研究開始当初の背景

大学における学生の学びの機会は、正課の授業だけでなく、正課外の様々な活動にもある。多くの大学では正課外の学習活動としてクラブ活動やサークル活動が行われており、学生はその活動への参加を通して学習していることが明らかになっている(例えば、高田 2018、池田ほか 2018)。さらに近年では、ラーニングコモンズのような学習スペースが提供され、正課外の学習活動が積極的に推奨されている。ラーニングコモンズは、レポートライティングや学生間の相互学習といった、正課と強く関連づいた授業外学習を行う場として位置づけられることが多い(例えば、井上 2009)。しかしそれだけでなく、学生プロジェクト(以下、プロジェクト)と呼ばれる正課教育課程とは直接関係しない学生による主体的な学習活動が推奨、支援されているケースも見られる(山本ほか 2017、山本ほか 2020)。プロジェクトとは、いわゆるプロジェクト学習(Blumenfeld et al. 1991)に類する学習形態を指す。プロジェクトにおいて学生は、自ら状況から問題を掘り起こし、その分析から解決すべき課題と目標を設定、目標の達成に向けて他の学生や学内外の人的リソースと連携しながら主体的に活動する。

正課外の学習活動を通じて得られる学習成果に関する研究から、学生は正課とは異なる学習成果を獲得していることが示唆される。例えば、山田・森(2010)は、正課と正課外の学習活動における汎用的技能獲得状況を学生の視点から調査分析している。具体的には、卒業を控えた学生の汎用的技能の習得状況を正課と正課外の比較を通して検討している。その結果、正課と比較して正課外の学習活動では、「社会的関係形成力」「持続的学習・社会参画力」「知識の体系的理解力」「自己表現力」の4点が有意に高く獲得されていることが示された。

また池田ほか(2018)は、キャリアレジリエンスと呼ばれる、キャリアに関する様々な危機に直面した際に自らそれに対処し回復していく力の育成と、クラブやサークル活動の関連を検討している。その結果、クラブやサークル活動に埋め込まれた「メンバーとのコミュニケーション」「学生の活動への積極的な関与」「目的意識を持った取り組み」「内省」が、キャリアレジリエンスを促す上で重要であると指摘している。

さらに池田(2021)は、正課外学習活動を、「広義の正課外活動」「準正課の活動」に分類し、さらにそれぞれに位置付けられる具体的活動ごとの教育的効果をレビューしている。教育効果として挙げられている内容は調査ごとに異なるが、共通して何らかの教育効果があることが示されている。

以上より、学生が取り組む正課外の学習活動は、様々な教育効果が見込まれる。そして、その教育効果は、正課外の学習活動であるからこそもたらされ得るものであることが示唆される。このことから、正課外の学習活動は積極的に推奨されるべき学習活動であると考えられる。実際に、これまで学生のサークル活動や主体的なプロジェクト活動への参加を促進するために、学生集団の構造を対象とした研究が行われており、その結果から学習成果獲得の前提となる活動への参加支援の要件が検討されてきた(例えば、山本ほか 2017)。

このように、正課外の学習活動における学習成果は、正課外の学習活動における経験と関連付けて検証、考察されてきた。しかし当然ながら、学生は大学において正課外だけでなく、正課の学習活動にも並行して参加し学習している。従って、正課外の学習活動における経験のみを取り出して考察するだけでなく、正課と正課外の学習活動の往還の中でどのような学習成果が生み出されているのかを検証、考察する必要がある。

以上から本研究では(1)学生は正課と正課外の学習活動を往還する中でどのような学習成果を、どのように獲得しているのか？(2)双方の学習活動における経験を接続させるためにはどのような教育的支援が必要なのか？という問いに従って研究を行う。

2. 研究の目的

本研究の目的は、正課と正課外の学習活動を往還することによる教育的意義を明らかにし、そのための教育支援を提示することである。この目的を達成するために(1)学生は正課と正課外の学習活動を往還する中でどのような学習成果を、どのように獲得しているのか、また(2)双方の学習活動における経験を接続させるためにはどのような教育的支援が必要なのか、の2点を明らかにする。

これまで正課と正課外の学習活動の教育的意義は、それぞれ個別で検討されてきた。先行研究から、双方の学習活動の特徴および意義が明確になってきた一方で、通常学生は、特に正課外の学習にのみ参加することはなく、同時並行的に双方の学習文脈・状況に参加し、往還しながら大学生活を送っている。従って、それぞれの学習文脈・状況を切り離して検討するのではなく、その双方をどのように関係づけたり、逆に関係づけなかったりしているのかを明らかにし、その教育的意義を考察することには意義があると考えられる。

本研究の学術的な意義について、これまで正課と正課外の学習活動のように、異なる学習活動間の関係性とそこでの学習は、越境学習の観点から取り込まれてきた(香川 2008、香川・青山 2015)。越境学習とは、従来の単一文脈あるいは状況における領域依存的な学習観を乗り越え、

それぞれの文脈・状況にも還元できない新しい知識(越境知)を構築するような学習を指す。従来の越境学習に関する研究では、看護師養成課程を履修する学生の学内での学習と病院など臨地での学習の往還(香川 2012)や、教員養成課程を履修する学生の学内での学習と学校インターンシップでの学習の往還(田島ほか 2016)などが対象とされてきた。看護師養成や教員養成では、学内と臨地という異なる文脈・状況であっても、それぞれ看護師や教師という目的のために各文脈・状況を積極的に接続することが前提となっている。一方で、正課と正課外の学習間では、積極的に接続することのみに意義があるとは限らない。双方を相対化したり、断絶したりすることに教育的な意義を得る場合も考えられる。このように、これまで個々に教育的意義を論じられてきた正課と正課外の学習活動の関係性を明確にすることが本研究の学術的な意義となる。

3. 研究の方法

上述のように、先行研究ではそれぞれの学習活動における学習効果やそれをもたらす要因などについては個別に検討されてきたため、双方の往還による学習効果や要因については十分に検討されてこなかった。従って、仮説に基づく調査が困難である。そのため、本研究では実際に正課と正課外の学習活動の双方への参加経験を有する学生を対象とした仮説生成型の調査研究を行う。

研究の目的に基づき、まず「学生は正課と正課外の学習活動を往還する中でどのような学習成果をどのように獲得しているのか」という問いへの回答を得るためのインタビューを実施する。その際、異なる学習状況間の往還に関する先行研究である、越境学習の観点に基づき、聞き取りを行った。なお、それぞれの学習活動における学習とその接点を調査するにあたり、「キャリア展望」を軸に聞き取りを行った。大学での学習の考察に関して、溝上(2009)は将来展望の存在を挙げている。溝上(2009)は、正課と正課外の活動双方へと積極的に参加し学習する活動的な学生は、将来展望もまた有していることを指摘している。従って、将来展望を意味する何らかの「キャリア展望」を軸として正課と正課外での学習活動が交差し、学習が生起している可能性を鑑み、インタビュー調査および考察を行った。

インタビューは、(1)それぞれの学習活動における学習成果、(2)それらを支える具体的な学習状況(それぞれの目的や活動形態、活動内容など)、(3)状況を越えた学習の具体的様相(あるいはその困難さや意図的な断絶など)の項目を基本とし、調査者との自由なやり取りの中で過去の経験を振り返りながら展開された。

そのうえで、調査より得られた結果から、二つ目の問いである「双方の学習活動における経験を接続させるためにはどのような教育的支援が必要なのか」を考察した。正課と正課外の往還による学習は、看護師養成や教員養成とは異なり、必ずしもキャリア展望に基づいて文脈や状況を積極的に接続したり、そこから学習成果を獲得したりすることのみに価値があるとは限らない。また、それらの学習状況とは異なり、意図的に往還を前提とした教育のカリキュラムが構築されているわけではない。これらを踏まえた学習支援の在り様を考察し、提示する。

4. 研究成果

本研究において行った調査のまとめを通じて、まず、(1)学生は正課と正課外の学習活動を往還する中でどのような学習成果を、どのように獲得しているのか、という問いに対しては以下が分かった。

正課と正課外の学習活動における学習の特徴としてそれぞれ、「具体的な文脈を伴わない抽象的知識の獲得としての正課の学習活動」と「抽象的知識を伴わない経験の獲得や問題意識の明確化としての正課外の学習活動」という特徴が見られたこと。

キャリア展望が、双方の学習活動の有意な往還に機能する可能性があり、それによって成果で得た学術的な抽象的知識による問題解決という統合が達成される可能性があること。

キャリア展望は、正課の履修選択等を通じて常に意識化される一方で、具体的経験の中から明確化される可能性があること。

ただし、自己の可能性を狭めてしまうことの回避や、選択したキャリア展望からの変更が難しくなることへの不安や恐れから、学生にとってその明確化は容易ではないこと。

キャリア展望以外の正課と正課外の学習活動の有意な往還による統合は、キャリア展望に関連しない問題解決場面においても生じるが、双方の学習活動への強い関与が前提であること、知識や経験の適応可能性は状況に依存することから容易には生じないこと。

まず、学生は正課と正課外の学習状況でそれぞれ異なる学習成果を獲得していたことが分かった。そして、それぞれの学習成果は、それぞれの状況の目標に基づいて獲得されるため、基本的に状況を越えた統合は生じにくいことが分かった。しかしながら、有意な学習活動間の往還、特に正課で得た抽象的な学術的知識等を正課外の具体的な問題状況への適応が、正課と正課外の学習活動の統合を通じた学習へとつながる可能性が明らかになった。そして、この往還と統合は、それぞれの学習活動における問題解決のためにも生じるが、特に学生のキャリア展望によって導かれる可能性があることが分かった。

上記のような往還は、分断されがちな正課と正課外の学習活動間の統合という、一方の学習活動のみでは達成されない有意なものとなる可能性があるものの、その実現は や で記した

ように容易に生じるものではない。そこで、統合という学習を促すために、(2)双方の学習活動における経験を接続させるためにはどのような教育的支援が必要なのか、という問いについては、以下が考察された。

双方の学習活動への強い関与が学習活動間の往還を通じた学習の前提となるため、正課だけでなく正課外の学習活動への参加の正統性を保障すること。

双方の学習活動を統合する可能性を持つキャリア展望を、特に低年次の学生が持つことが困難であるため、自己選択的な履修のシステム以外の方法でキャリア展望の明確化を後押しする機会を設けること。

一方の活動における問題解決のために他方で得た知識や経験の援用から統合へと向かうため、常によりよい活動を目指す問題発掘や問題解決あるいは改善を目的としたリフレクションを促すこと。

正課の学習活動は、単位認定という形で大学から正統性を与えられ、学生の強い関与が保障されている。一方で、正課外の学習活動は、学生の主体性に基づくものであり、その関与の度合いも学生の意思に任されている。こうした教員ではなく学生が主体となって集団を組織し、活動の目標を設定し、その達成に向けて取り組む活動が正課外学習活動の特徴であり(山本ほか 2017)、教育効果を生み出す重要な要因ではあるが(時任・久保田 2013)、正課のような正統性が保障されなければ、同様の強い関与を促すことは困難になる。従って、何らかの形で正課外活動に対する正統性を保障することが重要になる。また、先述のように、正課と正課外の学習活動は、学生にとって異なる学習活動として位置付けられることが一般的であるため、その統合に向けた意図的な介入も必要になるだろう。具体的には、キャリア展望とその実現に向けた取り組みや、一方の問題状況解決の必要性という機会が、他方で得た知識や経験の援用と統合に向かう可能性あることから、キャリア展望の具体化とその実現のためや、問題の発掘とその解決あるいは活動の改善のためのリフレクションの機会を設けることが有望であると考えられる。

今後の課題は、(2)において提案した教育的支援の具体化とその効果の検証が挙げられる。まず、(2)については、どのように大学として組織的な支援を講じられるか、が重要な点となる。大学によっては、ラーニングコモンズにおける学習支援(例えば山本ほか 2017、山本ほか 2020、山本ほか 2019)や、サービス・ラーニングなど準正課活動による学習支援(例えば、河井・木村 2013、木村・河井 2012)を行い、制度的な支援を構築している事例も見られる。今後は、その制度を具体的にどのように運営し学生の活動への強い関与を促しているのかなどの知見創出が求められるだろう。

加えて、(2) および に挙げた、学生の学習活動間の統合を意図したリフレクションなどの具体的な教育的介入についても実践研究が必要となるだろう。

以上から、継続的な正課と正課外の学習活動間の往還による学習の支援に関する実践および研究の蓄積が今後必要となる。

【参考文献】

- Blumenfeld, P. C., Soloway, E., Marx, R. W., Krajcik, J. S., Guzdial, M. & Palincsar, A. (1991) Motivating project-based learning: Sustaining the doing, supporting the learning. *Educational Psychologist*, 26(3-4). pp.369-398
- 池田めぐみ(2021) 正課外活動の教育効果と今後の研究課題. *工学教育* 69(1): 5-10
- 池田めぐみ, 伏木田稚子, 山内祐平(2018) 大学生のクラブ・サークル活動への取り組みがキャリアレジリエンスに与える影響. *日本教育工学会論文誌* 42(1): 1-14
- 井上真琴(2009) 「学びのマネジメント」を支援する. *IDE 現代の高等教育*, 510: 11-15
- 香川秀太(2008) 「複数の文脈を横断する学習」への活動理論的アプローチ: 学習転移論から文脈横断論への変移と差異. *心理学評論* 51(4): 463-484
- 香川秀太(2012) 看護学生の越境と葛藤に伴う教科書の「第三の意味」の発達: 学内学習-臨地実習間の緊張関係への状況論的アプローチ. *教育心理学研究* 60(2): 167-185
- 香川秀太, 青山征彦(2015) 越境する対話と学び: 異質な人・組織・コミュニティをつなぐ. 新曜社, 東京
- 河井亨, 木村充(2013) サービス・ラーニングにおけるリフレクションとラーニング・ブリッジングの役割: 立命館大学「地域活性化ボランティア」調査を通じて. *日本教育工学会論文誌* 36(4): 419-428
- 木村充, 河井亨(2012) サービス・ラーニングにおける学生の経験と学習成果. *日本教育工学会論文誌* 36(3): 227-238
- 溝上慎一(2009) 「大学生生活の過ごし方」から見た学生の学びと成長の検討: 正課・正課外のバランスのとれた活動が高い成長を示す. *京都大学高等教育研究* 15: 107-118
- 田島充士, 中村直人, 溝上慎一, 森下 覚(2016) 学校インターンシップの科学: 大学の学びと現場の実践をつなぐ教育. ナカニシヤ出版, 京都
- 高田治樹(2018) 大学生サークル集団における行事活動の心理的成果の探索的検討. *青年心理学研究* 29(2): 71-89
- 時任隼平, 久保田賢一(2013) 卒業生を対象とした正課外活動の成果とその要因に関する研究. *日本教育工学会論文誌* 36(4): 393-405

- 山田剛史，森朋子（2010）学生の視点から捉えた汎用的技能獲得における正課・正課外の役割．日本教育工学会論文誌 34(1)：13-21
- 山本良太，長友多絵子，中谷良規，巳波弘佳，飯田健司，厚木勝之，山内祐平（2020）初年次の学生が正課外学習活動に取り組む際に直面する困難とその支援方法に関する研究．日本教育工学会論文誌 44(2)：225-236
- 山本良太，中谷良規，巳波弘佳，藤井恭子，飯田健司，山内祐平（2019）異集団間連携による正課外学習活動支援に関する実践事例研究．日本教育工学会論文誌 43(Suppl.)：33-36
- 山本良太，中谷良規，明賀豪，巳波弘佳，飯田健司，厚木勝之，山内祐平（2017）ラーニングコミュニティでの主体的学習活動への参加プロセスの分析：正課外のプロジェクト活動へ参加する学生を対象として．日本教育工学会論文誌 40(4)：301-314

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 山本良太	4. 巻 2022(4)
2. 論文標題 キャリア展望を軸とした正課と正課外学習活動間の接続の様相：双方に参加する低年次学生の認識に基づいて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本教育工学会研究報告集	6. 最初と最後の頁 331-336
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15077/jsetstudy.2022.4_331	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山本 良太、鈴木 慶樹	4. 巻 2021
2. 論文標題 正課と正課外の学習活動の往還によるキャリア展望の具体化に関する研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本教育工学会研究報告集	6. 最初と最後の頁 25～32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15077/jsetstudy.2021.4_25	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 山本良太
2. 発表標題 正課外活動におけるメディアの役割に関する一考察
3. 学会等名 日本教育メディア学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Ryota Yamamoto
2. 発表標題 A study of characteristics of medium connecting formal and informal learning activities
3. 学会等名 21st International Conference for Media in Education 2023（国際学会）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------